

コモのSEWC2011

SEWC2011 at Como

東京工芸大学 客員教授 大越俊男

1. SEWCとは

JSCAは米国ATC/SEAOCとの間で、2年に一度、日米構造設計協議会を開催してきたが、これは二国間だけの会議なので、世界建築家会議（UIA）のように、4年に一度、世界の構造技術者が一堂に会する会議を開催したいという意見が出された。

矢野氏がSharpe氏に熱心に働きかけ、第1回構造技術者世界会議（SEWC）が、1998年にサンフランシスコで、米国民間技術者協会（ASCE）年次総会と同時に開催された。

SEWCは技術者の集まりなので、学術的な会議にならないように、主なトピックスを、職能に関する建築家との関係や構造設計料、経営、倫理等に決めた。これらは、実際には外部に漏れては困ることが多く、それまでの日米構造設計協議会の中でも、不活発なトピックスであった。

開催のための基金の受け皿として、また、SEWCの運営を支援するために、SEWC Inc.が設けられ、会長にSharpe氏が就いた。基金メンバーは、ACI, SEI(ASCE), IASS, JSCA, NCSEA, SEAOCの6団体である。

2. 第2回SEWC

第2回SEWCは、2002年に横浜で開催された。土木関係の後援を得て、橋梁技術者の参加を得たかったが、賛同を得られず、建築技術者の会議になってしまった。

今回は欧州で開催しようと、英国技術者協会（IStructE）やスイスの世界橋梁・構造技術者協会（IABSE）に賛同を求め、何回かの会議をもったが、会の主旨がダブるということで拒否された。そのために、第3回SEWCの開催地が決まらないままに、閉会することになった。

3. 第3回SEWC

1年後に、Sharpe氏からの連絡で、欧州に近い英連邦のインドではどうかという打診があった。Sundaram氏が実行委員長で、SEWC2007として、バンガロールで開催された。

インドは好景気で、SEWC Incからの援助に頼らず、企業からの資金を集め、インド楽団の演奏や豪華な食事で、大々的に開催された。多くの学生が参加した。日本からの参加者は、不況で少なかった。

SEWC Incが開催され、会長をSharpe氏からSundaram氏

に交代し、副会長に大越が指名された。今回は、イタリアのGuiliani氏が委員長になり、2011年にComoで開催されることになった。

活力のあるインドでは、Sundaram氏が中心になって、SEWC INDIAを設立し、2009年にSEWC INDIA国際コロキウムを開催した。

4. 第4回SEWC

会議の準備は順調に始められたが、欧州は景気が悪く、Guiliani氏からSEWC Inc.ボード・メンバーに、アブストラクトの応募依頼がたびたび寄せられた。リーマン・ショックの後遺症が大きく、欧州や米国の参加が危ぶまれた。募集時に、SEWC2011の8個の目的が示された。

- 目的1 すべての大陸の構造技術者は、集まり、経験を分け合おう。
- 目的2 総合的な設計の存在と優位を意識しておこう。
- 目的3 建築家と技術者との協同の経験を分け合おう、その態度を考慮に入れよう。
- 目的4 美しさと構造技術の中の調和を意識することを身に着けよう。
- 目的5 特殊な問題の手がかりを見つけよう、知らないままで孤独にならないように。
- 目的6 設計と施工の流れに関して科学的な手がかりや事例を論じよう。
- 目的7 材料の特性の発展を身に着けよう。
- 目的8 構造振動の知識を最新のものにしよう。



写真1 SEWCジャーナル
Photo 1 Journal of SEWC



写真2 SEWCローランド・シャープ賞
Photo 2 The SEWC Roland Sharpe Medal

5. JSCAグループ

日本からのSEWC2011への参加者は、JSCAと斉藤先生の募集によるものであった。JSCAからは13名が参加した。斉藤先生のグループは28名の予定であったが、3.11東日本大震災の影響で、建設会社の参加者が辞退し20名の参加になった。そのほか4名の参加があった。

JSCAグループは、全員参加で、3月30日に成田を出発した。JSCAグループは、ローマからベニスに飛び、建物の視察を行った。ベニスからバスでドロミティ街道を通り、ベルニナ急行に乗り、ポントレジーナからバスでコモに向かった。

斎藤グループは、原発事故の影響を受け、出発を遅らされた揚句、香港経由になり、24時間遅れて到着し、開会式には間に合わなかった。

6. SEWC2011

4月3日、JSCAグループは、交通事故による渋滞で、ホテルに着くのが1時間遅れた。19時からの会食に遅れて参加した。参加者は、運営委員会とSEWC Inc.のメンバーであった。85歳のSharpe氏と88歳のJane婦人の参加は、予期しないものであった。

会場は、コモ湖畔チェルノービオのビラ・エルバで、ピスコンティの別荘の中に作られている。

4月4日、8時30分に開会式がメインホールで開催された。参加者は300余名であった。式は、SEWC Inc.のボード・メンバーによって執り行われ、東日本大震災の犠牲者を悼んだ黙祷で始まった。続けて4題の総合講演が行われ、終了した。コーヒー・ブレイク後に、講演は5か所の会場に分かれて行われた。その後の総合講演は、4日の午後2題、5日に4題、6日に4題であった。いずれも、プロフェッショナルな課題で、会議に相応しいものであった。

7. SEWC Inc.

初日の4時からのコーヒー・ブレイクを利用して、SEWC Inc.が開催された。ボード・メンバーの参加者は、



写真3 ビラ・エルバ会場
Photo 3 Villa Erba, Como

Sundaram会長、カナダのSrivastava教授、大越の各副会長、Giuliani博士、Siviero教授、Sharpe氏、オブザーバーとして、寺本氏、金箱氏であった。米国のAng教授とCagley博士、韓国のChang教授は欠席であった。

会長・副会長は、継続することとなった。JSCAからは、大越に代わって金箱氏を副会長に推薦したが、拒否された。事務局は、サンフランシスコから、バンガロールに移すことが了承された。

今回は、シンガポール構造技術者協会とプレストレス・プレキャストコンクリート協会の共催で、2015年にシンガポールで開催されることになった。

SEWC Journal 1号が発行された。これは、SEWC INDIAが企画し、Raghuprasadが編集し、隔年発行される。Sharpe氏、矢野博士、Srivastava教授が、終身名誉会員に決まった。

SEWC Roland Sharpe Medalが新設され、矢野博士、Sundaram氏、Giuliani氏に与えられることになった。今回は3万ユーロの赤字が見込まれ、SEWC Inc.からの補充を提案したが、Giuliani氏が何とかするというのであった。

8. 講演セッション

講演のセッションは、超高層ビル、Archineering、コンクリート工学、アルミ、木構造、複合コンクリート、修繕・改修、防災工学、風工学、コンクリート理論、鋼構造、軽量構造、解析、耐震工学、橋梁、形態創造、テンセグリティ、振動とディバイス、耐震診断と耐震補強、サステイナブル構造、ガラス、試験、特殊RC構造であった。

9. 閉会式

閉会式は、夜8時過ぎ、お別れ会食の前に始められた。SEWC Inc.会議の報告があり、終身名誉会員の報告がなされた。また、SEWC Roland Sharpe Medalの授与が行われた。これは、急遽作られたもので、正式なものは、作り次第、送られる。なお、JSCAグループは、ボンベイの遺跡を視察し、帰国した。



写真4 JSCAグループ集合写真
Photo 4 JSCA Groupe